

2025 年第 51 回木曾音楽祭『聴きどころ』

長きに渡り木曾音楽祭のミュージックディレクターを務められました山本正治、山崎伸子の両氏より引き継ぎ、今年は白井圭、村上淳一郎、岡本正之の3人がプログラムを練りました。今回も木曾音楽祭ならではの管楽器、弦楽器、ピアノを含む室内楽の名作をお愉しみいただける、盛りだくさんのプログラムとなっています。

参加アーティストの中では、葵トリオで大活躍中のヴァイオリン奏者小川響子とチェロ奏者伊東裕、そして新進気鋭のオーボエ奏者猪子京子との初共演も楽しみです。

1 日目金曜日、音楽祭の幕開けには G.ビゼーのオペラ『カルメン』より、どなたでも聴いたことのあるナンバーを管楽アンサンブルの編曲で。その後のピアノ津田裕也と弦楽メンバーによる D.ショスタコーヴィチの「ピアノ五重奏曲 ト短調」、J.ブラームスの「弦楽六重奏曲第 1 番 変ロ長調」はあまりにも名曲。

2 日目土曜日は、20 世紀前半から二度の世界大戦までヨーロッパに新しい波が押し寄せた時期に活躍した、F.プーランク、P.ヒンデミット、A.シェーンベルクらの時代を色濃く反映した作品と、後半はがらりと趣向を変えて、J.ハイドンの雅やかなカッサシオン(宮廷晩餐会に相応しい音楽)と欲張りなプログラム。

3 日目日曜日には、ほぼ同時期である L.ヤナーチェク(チェコ)と G.フォーレ(フランス)作品で東西欧州の旅を楽しんでいただき、オーボエ猪子京子とファゴット河村幹子による A.ジョリヴェの「オーボエとファゴットのためのソナチネ(1963)」の洒脱な一品を挟み、最後は M.ブルッフの「弦楽八重奏曲」の重厚華麗な響きで今年の木曾音楽祭を締めます。

夏の木曾の風物詩「木曾音楽祭」ならではの名手たちによる室内楽、木曾駒高原の風と音楽に包まれ、ゆったりとした晩夏の三日間をどうぞお楽しみ頂けますように。

木曾音楽祭ミュージック・ディレクター 岡本正之